



弦楽器製作者

田 中 博

活動の軌跡

～丹後・峰山－京都・桂－東京・青山～

—田中 博の生い立ち—

I 峰山時代 (1920~38, 1945~51)

•1920年9月7日

京都府中郡峰山町字上壱番地に父、重太郎、母、ふ美の長男として生まれる。播州出身の父は建設業を営み、主に公共事業を請け負う。(峰山小学校、峰山高等学校、震災記念館、比治山トンネル建設工事、宮津線敷設工事、淀競馬場など)



田中重の屋号として知られる。



中学時代



高校時代



丸紅新社屋にて (右)

•1938年

京都府立工業高等学校を卒業。軍事色が強まる学生時代を送るがあらゆるスポーツを楽しむ一方で絵画や詩歌を嗜む。3月、丸紅京都支店に入社。

•1939年

10月退社。12月志願して陸軍騎兵部隊に入隊。

•1940年

中国大陸へ出征。やがて負傷して除隊。

•1945年

峰山町の実家にて療養。

•1947年頃、神戸や京都から峰山町に疎開していた当時三大名工と称された弦楽器製作者、峯沢峯三、泰三両氏から楽器製作の手ほどきを受けてウクレレ、ギターやヴァイオリン製作を始める。注1) 新聞記事を参照(P.4)

II 京都時代 (1952~55)

独立して京都、桂に自ら工房を建て、制作に打ち込む。以後3年間京都で修行する。この間京大の教授や日本画壇の人々と親交を結ぶ。

•1955年

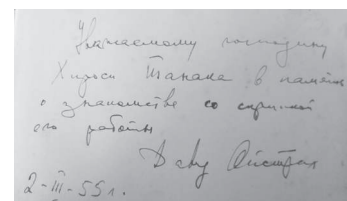
3月3日、峯沢氏と共に、自作のヴァイオリンを持参し、来日中のダヴィット・オイストラッフ氏とミヤコホテルにて面会。氏はタナカの制作したヴァイオリンを試奏して「日本の音楽水準の高さに驚いた。」との感想を述べる。 通訳及び翻訳はマルクス経済学者の木原正雄氏。 ※注2 新聞記事を参照(P.4)



左から峯沢泰三氏、田中博
中央 峯沢峯三氏



田中の楽器を試奏する
D.オイストラッフ



尊敬するヒロシ・タナカさんへ
「お仕事を通してお知り合いになつた記念に」
ダヴィット・オイストラッフ
1955-3-2
木原正雄訳・平田書

III 東京時代（1956～90）

・1956 年

日本画壇の菊池契月画伯の子息らの知遇を得て上京。赤坂台町の近衛音楽研究所で研鑽を積む。指揮者である近衛秀麿氏が結成した ABC 交響楽団の国内演奏旅行に同行。同楽団首席ヴァイオリン奏者であるシュタホン・ハーゲン氏がタナカの製作楽器で演奏する。同楽団ヴァイオリン奏者カルボーニ氏のもとで更に修行する。



近衛邸でウイスキーを手にする チェリストのツヴェイ・ハレル氏と
シュベルトの雪像と。 仕事場にて 右から田中、2 番目は近衛氏

・1958 年

独立して青山に工房を構える。国内外のオーケストラ（N 響、日フィル、都響、読響、米三大オーケストラ、ベルリンフィルハーモニー、パリ国立管弦楽団、スイスロマンダ管弦楽団等）のメンバーや、ソロ活動をする演奏家の楽器の修理、調整や製作に携わり以来 30 年過ぎず。



青山旧住居時代の工房にて 弓の毛替えをする田中 赤坂ホテルニュージャパビル
内の楽器輸入会社（株）白川総業 役員時代（一番右） チェロの修理

・1971 年

株式会社タナカを設立。この頃 NHK 交響楽団顧問となる。

・1973 年

長年の取引先の楽器販売会社社長であり、アメリカで唯一、ドイツ・ギルド組合によってマエストロの承認を受けたウィリアム・メーニック氏に招聘されて、フィラデルフィアで開催された弦楽器製作者による国際会議に出席。東洋人として初めて正式なメンバーとなる。



・1975 年

フィラデルフィアで開催された国際会議に出席。イタリア人の弦楽器製作者でタナカが初めてその楽器を日本に紹介したジョルジュ・ペレソン氏が来日。

フィラデルフィア管弦楽団のメンバーからの信頼は厚く、贈られた SP レコードを多数所蔵。（指揮はユージン・オーマンディー）



国際会議のメンバー 左 ウィリアム・メーニック氏 ヌツェン氏と。 来日中のメーニック氏を上野・浅草・銀座・千葉・鎌倉に観光案内



左 チェリスト徳永健一郎氏 タナカが制作したチェロを 絶賛するメーニック氏 タナカの工房で作業をするペレソン氏 田中千香士氏ご夫妻

1978 年

・外出先の千葉で発症。以来 12 年間自宅で療養する。

・1979 年

1 月イスラエル出身のヴァイオリニスト、ロニー・ロゴフ氏の提唱に賛同したオーケストラのメンバーによる『ヴァイオリン製作者 田中博氏の回復を願うチャリティー・コンサート』が新宿厚生年金会館大ホールにて行なわれる。新聞各紙に取り上げられ、大盛會を収める。 ※注 3 新聞記事 (P. 5. 6. 7)

青山に工房を構えたとき以来、公私両面でタナカが相談を受け、タナカを父や兄のように思慕の情を寄せる演奏家のたゆまない温かい励ましを受けて友人、知人そして家族の愛に包まれた穏やかな晩年を送る。

・1990 年

1 月 8 日、赤坂山王病院にて死去。10 日麻布光林寺にて葬儀が執り行われる。

3 月、父重太郎の手がけた全性寺に埋葬される。

・1996 年 4 月 7 日、東京赤坂ホテルニューオータニ梅の間にて 7 回忌の追悼コンサートが N 響有志により行われる。(※注 4 P. 7 の 写真) これを契機に 1996 年 7 月 1 日に旧峰山町役場玄関ホールにて町主催の追悼コンサートが行われる。1997 年 7 月にも同ホールにて N 響メンバーによる弦楽四重奏コンサートが開催される。 ※注 5 新聞記事参照 (P. 8)

・2005 年遺品の一部が浜松市楽器博物館に寄贈される。

・2006 年 楽器を含む音楽資料の収蔵と活用を兼ねて音楽普及を目的とする NPO 法人音楽のまちづくりが遺族によりタナカの郷里にて設立される。 ※注 6 新聞記事参照 (P. 9. 10. 11)

・2009 年 10 月 17 日、法人事務局をタナカヴァイオリンミュージアムとして一般公開する。注 7 新聞記事 (P. 12)

・2010 年 5 月 28 日 東京グランドプリンスホテル赤坂 旧館サファイヤの間にて田中博没後 20 年記念コンサートを開催。(協力 港区立青山小学校、青山中学校同窓会) ※注 8 写真等参照 (P. 12. 13. 14. 15)

田中博ゆかりの演奏家、タナカ楽器を長年愛用して頂いている方々のご協力により製作楽器の展示及び展示楽器を使用した弦楽アンサンブル演奏会を開催。

同年 11 月 23 日京都府庁旧知事室にてタナカ楽器を使用したデュオリサイタルを開催。

・2011 年 5 月 20 日タナカの郷里にてタナカの楽器を使用したデュオリサイタルを初演し、好評を博す。

同年 6 月 26 日東京市ヶ谷ルーテル教会にてタナカの製作楽器によるデュオリサイタルを開催。

・2012 年 6 月 22 日東京ルーテル教会にてタナカ楽器によるカルテット演奏会を開催。

同年 10 月 28 日田中の郷里にてタナカ楽器を使用したカルテット演奏会を開催。翌年は 5 月 31 日、6 月 1 日に実施される。同様にして 2014 年 9 月 1 日、2015 年 10 月 17 日、2016 年 12 月 10 日に上演される。注 9 (P. 16)

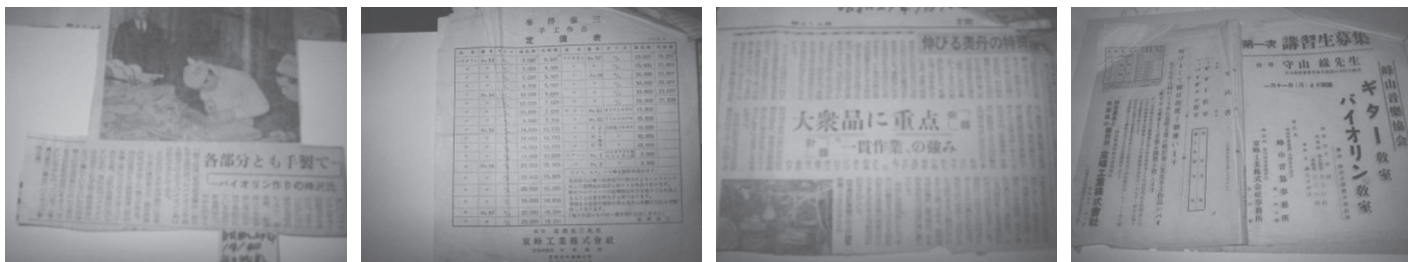
・2014 年 3 月 18 日ルーマニアのオラデア国際音楽祭にて地元管弦楽団首席奏者らにより Tanaka Instruments Concert が開催され、地元新聞に大きく掲載される。 ※注 10 新聞記事参照 (P. 16)

・2020 年 11 月 22 日タナカの郷里にて 6 月に結成された地元音楽愛好家による String Ensemble Tango と 2010 年以来タナカ楽器を使用した演奏会開催を通じた音楽普及の理解者、ヴァイオリニストであり指揮者であるギオルギ・バブアゼ氏の協力を得て、1979 年 1 月 30 日開催された「ヴァイオリン製作者 田中博氏の

回復を願うチャリティーコンサートコンサート」のなかで演奏された曲目の一部であるモーツァルトの作品、「ディヴェルティメント ニ長調 K136」、バッハ作「ヴァイオリン協奏曲第2番 ホ長調 BWV1042」など上演。

備考 注1

※注11 写真 参照 (P. 16. 17)



～楽器製作が当時の産業となったことを記録する記事～

【伸びる奥丹の特殊産業】 昭和29年1月16日 読売新聞から

昨秋頃からヴァイオリン、ギターなどの楽器製造に乗り出した峰山町京峰工業会社は、わが国楽器界にその名を知られている名工峯沢泰三氏が同郡吉原村の郷里に隠棲したのを機にヴァイオリンの製造に乗り出し月産14、5台を出しているが、全国一流店からの注文が相次いで信じられないほどの大繁盛振りを見せている。だが何といっても同業が少なく名工の手に成るといふ2拍子揃った強みは奥丹後の特殊産業としてその発展が約束されているといえる。

【奥丹に異色のヴァイオリン製作工場】 昭和29年1月16日毎日新聞から

ヴァイオリン作りの峯沢氏 峰山にヴァイオリンとギター教室が生まれた。…小、中高校、一般会員30名が参加し峰山小学校で始められている。

【音を作る工匠】 ～峯沢峯三氏の紹介～ 昭和30年2月10日 大阪新聞から

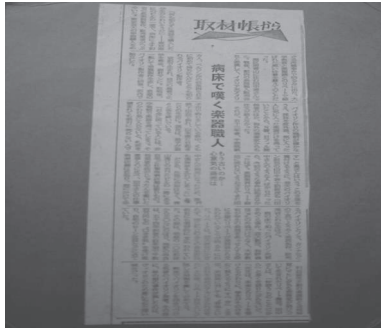
・氏は57になるまで38年間この道一筋に打ち込んできた。その間来朝した名ヴァイオリニストの愛器を修繕して感謝されたことも多い。氏の作ったヴァイオリンが世界旅行したこともある。桑港交響楽団のコンサートマスターをしているプリンデルは昭和2年イタリアで演奏した。それを後に諏訪根自子が10年間ヨーロッパで愛用したという因縁がある。楽聖カサルスも氏の存在を知っており、一昨年、三重奏団を率いて訪れたボシュコ女史は「カサルスはミネザワのセロを見たといっていたが、私はミネザワのヴァイオリンを見た。」といって喜んだという。ミネザワをはじめ、ニッポンの手になったヴァイオリンが世界の聴衆を魅了する日もやがては来るだろう。」
・峯沢泰三氏(54)は、神戸で叔父の経営していた楽器店で製造の技術を磨き、戦前ではハンドメイドによるヴァイオリン製作では日本の三大名工の一人といわれるまでになったが戦災で郷里の峰山町に隠棲、こつこつと名器製作に余生を送っている。・日本のヴァイオリンの世界進出のために生涯を捧げると語っているが、やがて世界の名器がこの奥丹から生まれるのも夢ではなからう。

注2

ホテルで音楽教室 気さくなオISTRAFF氏 昭和30年3月3日 読売新聞

世界の音楽会の最高峰ダビッド・オISTRAFF氏は既に二回の大阪公演で関西に【オISTRAFF旋風】を喚起した。オISTRAFF氏の入洛を知った京都府のヴァイオリン制作者3名はこの夜、自作のヴァイオリンを持ってきてミヤコホテルを訪れ、オISTRAFF氏の批評を求めた。京都府左京区聖護院東町の峯沢峯三氏(56才) 中郡峰山町吉原の峯沢泰三氏(53才)と右京区川原横田、田中博(34才)だが、訪日以来、私的な会見はほとんどしなかったオISTRAFF氏もこころよく自室に3人を招き、そのバイオリンを手にとってラローのスペイン交響曲をあざやかに弾いた。親しみやすい態度に峯沢さんたちを感激させた。

注3 (写真)



【取材帳から】 『病床で嘆く楽器職人』 昭和53年12月 毎日新聞から

「何も知らずに楽器を購入した学生がかわいそうだ」-東京港区のビルの一室で、病床に伏す初老の弦楽器製作者、販売業者がつぶやいた。東京芸大の楽器購入をめぐる汚職事件で明るみに出た、大学教官と楽器商とのリベートで結ばれた黒い癒着を憂えてのことだった。港区南青山に住む田中博さん(58)。戦後、都内の楽器輸入販売会社と提携してイタリア系アメリカ人、ペルソン作の弦楽器を日本に初めて持ち込んだことでも知られるヴァイオリン製作者。京都で生まれ、地元の高専で化学を専攻、商社マンに。敗戦後、一転して楽器製作を志し、京都のヴァイオリン製作者に師事、都内で独立した。ヴァイオリン作りの腕前は確かなうえ、採算を度外視、気に入った人に気に入った楽器だけを売っていたことから、N響、日フィル関係者のほか、海外の演奏家からも注文が絶えなかった。それが53年春、千葉県銚子市で釣りをしている最中、くも膜下出血で倒れ、以来寝たり起きたりの生活に。現在は弟子が細々と後を継いでいる。『お金に困っている人には、赤字覚悟で楽器を売ってしまう。その代わり気に入らないと札束を積まれても絶対に売らない人です』と奥さんはいう。この言葉を裏付けるように芸大のヴァイオリン担当の田中千香士助教授も『田中さんのような人ばかりだったら、今回のような事件は起きなかったはず。楽器業界がリベート商法に流れないように抑えてきた田中さんが病気になったため、業界も演奏家も乱れてしまった』と。だから生活に余裕はなく、青山道りの古びたビルの一階にある自宅と仕事場兼店舗は借り物。他業者の店がじゅうたんを敷いた豪華なのに比べ、田中さんの仕事場兼店舗は板張り。壁に掛けてあるヴァイオリンとノミ、カンナなどの工具でようやく楽器製作、販売業者とわかるほど。病の床で知ったヴァイオリン売買をめぐる事件。芸大教授。海野義雄(45)の汚職だけでなく、大学教官が学生の楽器を斡旋する際に多額のリベートが楽器商から支払われていることが明るみに出た。リベートは芸大教官に限らず、国公立の多くの音楽担当教官にも慣習的に支払われていた。その額は、価格の10%前後から30%に上り、海野の場合は、54年前後の数年間で千数百万円もの“口きき料”を受け取り自宅のローン返済などに充てていた。利益優先主義の楽器商と金銭感覚に麻痺しがちな芸術家が結びついてしまったリベート商法。田中さんは『仲間うちのことだから』と多くを語りたがらないが、『先生は、本来ならリベートを受け取るかわりに、学生がその分を安く買えるようにすべき』と主張、楽器商に対しても“音楽という芸術を商売の垢にまみれさせた”と示唆、リベート商法という悪しき習慣を厳しく非難する。病床でヴァイオリンを抱き続ける気骨のバイオリン業者。その身に年の瀬が残したのはヴィオロンのため息にも似た深い嘆きだった。

闘病見舞いの演奏会 外人バイオリニストの提唱で 昭和54年1月18日 読売新聞から

“旋律ドクター” 田中さんにN響団員ら13人 今月30日

“孤高のバイオリン制作者” 田中博さん(59) (東京都港区南青山2の27の7) が、クモ膜下出血で倒れてから10ヶ月になる。病状は、日々快方に向かっているが、弦楽器の修理や調整で、“旋律のドクター” 田中さんの世話になっている音楽家たちが、「1日も早く元気になって欲しい」という願いをこめて、今月30日、東京・新宿の厚生年金会館でチャリティー・コンサートを開く。曲目の一つはドボルザークの「弦楽セレナーデ ホ長調」。演奏家たちが送る小夜曲はきっと田中さんを元気づけるに違いない。

田中博さんは、終戦直後から30年以上にわたってヴァイオリンなどの弦楽器製作一筋に生きてきた。酒が好きで、近くの酒屋からもらった前かけ姿でヴァイオリンを作り続けてきた。また、音楽批評は歯に衣着せず、音楽家にとっては耳が痛いこともあるが、的を射た、率直な意見に音楽家たちは魅せられもしている。今回のコンサートに参加するヴァイオリニスト植木三郎さん(45) (読売日本交響楽団) は「田中さんは音の出し方について

アドバイスをしてくれる。本当の音を知っている人だ。私は 20 年以上、お世話になっているが、今だに叱られている。何時会っても怖い人だ。酒は一晩でウイスキー2 本、それでいて翌朝はケロリとして仕事をしている。むしろ外国の方が有名で楽器製作者の国際会議に呼ばれる日本人は田中さんだけだろう。国際的視野も広く、教えられることが多い」とその温かい人柄を慕っている。

その田中さんが昨年千葉県銚子市の海岸で倒れた。クモ膜下出血。千葉市の病院に入院して手術、以来闘病生活が始まったが、病状は次第に回復、昨年 11 月には退院の運びとなり現在は自宅で療養を続けている。今回のチャリティー・コンサートの話が持ち上がったのは昨年夏。有名な指揮者チェリビダッケ氏の秘蔵っ子ヴァイオリニストといわれ、田中さんと 10 数年来の付き合いだというロニー・ロゴフ氏が来日した際、「個人で何かやるよりコンサートを開こう」と提案、N 響のコンサートマスター田中千香士さん (39) が賛同、N 響のメンバーを中心に企画が進められ、話はトントン拍子でまとまった。出演するのは、ヴァイオリニスト、ヴィオラ、チェロ、コントラバス奏者の音楽家 13 人でロゴフ氏も特別参加する。曲目はバッハの「ヴァイオリン協奏曲第 2 番 ホ長調」など 3 曲。このコンサートの幹事役の一人、田中千香士さんは「私たちのヴァイオリンのドクターである田中さんに一日も早く元気になってもらいたい気持ちで一杯です。」と話していた。

朝日新聞 (人) の欄から 田中千香士氏

(ガミガミ親父ことヴァイオリン制作者田中博氏の病気快癒を願い、コンサートを開く N 響コンサートマスター)
 「・・・僕たち困り果てたんです。ヴァイオリンの調整の名医にもしものことがあったら・・・この際みんなでガミガミ親父を慰めてコンサートを、ってことになったんです。」

一親父なんっていうと姓は同じでああなたのお父さんみたいで。

「ヴァイオリンの音ってことでは、僕らにとっては親父以上の存在です。職人氣質・・・音のセンスは抜群でクレモナの名器の原点の音を知っているんですね。調整してもらいにいってその楽器の取り扱いが悪いと怒鳴られる。気の弱い人はもうそれだけで行かなくなる・・・調整の腕は勿論ですが、その飾らない人柄に惚れ込んでますね。外人プレーヤーにも親父のファンが多い。今度のコンサートもチェリビダッケの秘蔵っ子といわれるロニー・ロゴフがアメリカから駆けつけてコンチェルトのソロパートを受けもってくれる。彼も親父ファンなんです。・・・」

1979 年 1 月 30 日 ヴァイオリン制作者 田中 博氏の回復を願うチャリティーコンサート 厚生年金会館大ホール

Program

モーツァルト／ディヴェルティメント ニ長調 K136

バッハ／ヴァイオリン協奏曲 第 2 番

ホ長調 BWV1042

ドヴォルザーク／弦楽セレナーデ

ホ長調 Op. 22



ヴァイオリン ロニー・ロゴフ (特別出演)

田中千香士、川上久雄、植木三郎、小島秀夫、高橋眞、板橋健
 公門俊之 ヴィオラ 大久保淑人 梯 孝則
 チェロ 徳永健一郎 田沢俊一
 コントラバス 小野崎 充

プログラム制作 (株) 白川総業

協賛 ステーキハウス ケインズ、うどんすき 堂島、
 青山 割烹・すし つかさ

田中さんと共に歩む 楽器保険専門代理店 TKA CO., LTD



《プログラムの中のメッセージ〈田中博さんの快癒を願って〉》

恩地 勝（京都大学理学部教授）

「・30年あまりの付き合いとはいえ、年に2、3回しか顔を合わす機会がなかったので、彼が判断してくれるかどうかいささか気がかりであったが、私を見るなり、『ア、わるいのが来たな』とってくれたのでほんとに安心した。

彼は、丹後の峯沢に手ほどきを受けた後、京都でも暗中模索時代を経て日本画家の菊池隆志さん、音楽家の近衛さんの援助を得て上京し多くの優れた内外の演奏家とその楽器や弓に接して急速に成長していった。

田中さんは口の悪さに反比例して温かい心の持ち主である。そして何よりも誠実である、虚偽と不正を限りなく憎む誇り高き技術者である。いかがわしい楽器や弓が横行し、法外な値段で売買されている今日、彼の腕と鑑識眼の高さは多くの弦楽器奏者や愛好家たちの拠り所になっているといっても良い。彼の嗜好はヴァイオリンの華やかな音づくりよりもむしろ、地味に溢れ人生の憂愁を歌う中低音の楽器づくりにあると思われる。従ってヴィオラやチェロの製作が彼の本領ではあるまいか。・・・」

小林武史（ヴァイオリニスト）

「・兎に角怖い人で機嫌が悪いときに行くによく説教されたものだが、おかげでいろいろ楽器について勉強させられ感謝している。日本に正しい歴史を残すとすれば彼は我々楽団にとってなくてはならない人である。音についてはうるさく、奏法についても我々以上に客観的にものが言えたとし、弦楽器の調整について確固たる信念を持っていたようである。・・・」

前橋汀子（ヴァイオリニスト）

「・やがて15年になります。田中さんがいてくださることで安心して毎年帰ってくる日本でした。ためになる毒舌に私は一生懸命耳を傾け、おかげでいろいろ楽器の勉強をさせて頂き感謝しております。私の主治医はいつまでの元気でいて下さらないと困るのです。・・・」

黒沼俊夫（京都芸術大学音楽学部教授）

「・僕とは古い付き合いで戦後復員してから恐らく彼のところにしか行ったことがないので楽器にしても弓の張替えにしても僕の持っているものはよく知っていてくれて、ただ黙って置いて来るだけで用は済んでしまうほどでした。今はその弓の毛替えひとつにも事欠く有様で早く回復してくれないと困るのです。大分一徹なところがあって他のお客のいる前で良く口喧嘩をしたりしたのですがそういうところが好まれたり、又嫌われたりして大分逃げ出した人もいたようでした。ただお金のことには全く恬淡としていたので家族の方も大変だろうと思います。兎に角早く口げんかの一つも出来るようになって欲しいと願っております。・・・」

*他に岩淵龍太郎（京都市立芸術大学音楽学部教授）、江藤俊哉（ヴァイオリニスト）、久保田良作（ヴァイオリニスト）、長谷恭男（N響事務局長）、ルイ・グレーラー（ヴァイオリニスト）の諸氏からメッセージが寄せられました。

注4

故田中 博 7回忌の集い 1996年4月7日 ホテルニュータニ 梅の間

これを契機に同年6月29日、郷里の旧峰山町役場ホールにて町主催弦楽カルテット演奏が行われることになる。

Program

バッハ/G線上のアリア
モーツァルト/
アイネ・クライネ・ナハトムジーク
さくら
水谷川 忠俊編曲



出演：ヴァイオリン 田中千香士、金田幸男、板橋 健、鈴木弘一、根須昭義、公門俊之、大久保淑人
ヴィオラ 梯 孝則、大澤 浄 チェロ 田沢俊一、茂木新緑 コントラバス 建部欣治



・朝日新聞から 【供養の演奏 恩人に届け 峰山町出身バイオリン製作者田中さん7回忌】

「峰山町出身のヴァイオリン製作者で69歳で亡くなった田中博さんの7回忌の供養にと1日夜、NHK交響楽団の4人が同町役場のリビングホールで弦楽四重奏のコンサートを開いた。田中さんは東京・青山に工房を持っていた。演奏への批評は厳しかったが、気に入った演奏家には一番の出来栄えとなった作品を売るなど、若い演奏家の相談相手となって日本の音楽水準を陰で支えた人という。死後もその人柄を慕って峰山町の墓所を訪れる音楽家が多い。

この日の演奏会は田中さんの長女で町内に住む千穂さんが墓参する4人に頼んで実現した。N響団員のコンサートは同町で初めて。満員の約300人がドボルザークの「アメリカ」など3曲に聴き入った。2回のアンコールも含め2時間のコンサートに千穂さんは「心の琴線に触れる素晴らしい音色でした。この上ない父の供養になりました」と感激していた。田中さんは1920年に同町で生まれた。第2次世界大戦に従軍して負傷、帰郷して療養中に疎開してきた人から弦楽器の製作を教わったそうだ。56年から東京で制作を始め、内外の多くの演奏家が田中さんの弦楽器を求めた。・・・」

・京都新聞から 【峰山 N響団員が友情の四重奏 故田中さんを偲び町役場で】

「・・・コンサートは午後7時の開演と共に約300人の聴衆が集まり、メンバーらが奏でるモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」、ハイドンの「ひばり」などの調べに聴き入っていた。最後はアンコールを求める拍手が会場に鳴り響いた。田中さんはN響や海外の演奏家の弦楽器の製作や修理を手がけ、信用度は群を抜いていたという。1974年からN響顧問を務めていたが6年前69歳で亡くなった。4月7日には「7回忌の集い」が東京で開かれたこともあり田中さんの長女の千穂さんがN響メンバーに呼びかけてコンサートが実現した。」

・毎日新聞から 【峰山町出身、バイオリン制作者 田中博さん追悼の調べ N響の4人が演奏】

「・・・今回の演奏会は長女の千穂さんがたびたび墓参りに訪れるN響のメンバーに『父の供養を兼ねて地元でコンサートが開けないか』と相談したのがきっかけ。申し出を快諾したN響団員がコンサートツアーの途中に同町に立ち寄ることになった。午後7時に開演。金田幸男さんと板橋健さん（ヴァイオリン）、永野雄三さん（ヴィオラ）、田沢俊一さん（チェロ）、がモーツァルト「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」、ハイドン「ひばり」、ドボルザーク「アメリカ」などを演奏する。入場は無料。・・・」



N響が町にやってくる 峰山町出身の顧問しのび 1日コンサート

峰山町出身のバイオリン製作者で、NHK交響楽団顧問だった田中博さん（故人）の友人だった同楽団員有志が7月1日、田中さんをしのび、同町で追悼コンサート「弦楽四重奏の夕べ」を開く。N響の本格的な演奏は同町で初めて、出演するのは、N響の現役メンバーでバイオリン奏者の板橋健さんと金田幸男さん、ピオラ奏者の永野雄三さんとチェロ奏者の田沢俊一さんの4人。板橋さんらは平成2年に70歳で亡くなった「田中さんを偲び、生誕の地で演奏したい」と関係者に申し出、町が音楽や演劇を不定期に無料で実施しているハイパーステークとして実施することにした。・・（産経新聞）

彼の弦楽器工房は名器と「まち」を生んだ

「丹後に音楽NPO」

9月8日 記念演奏会

田中さんは、戦時中に疎開してきていた弦楽器製作者から技術を学び、修業を積んで1958年、東京に工房を開いた。手掛けた楽器は、品格ある音からN響メンバーらが愛用。前橋汀子さんや旧ソ連の故ダビッド・オイストラフさん（08～74）ら世界的なヴァイオリニストからも高く評価された。

昼夜を問わず修理に出向き、苦学生には無償で楽器を提供。一方で、有名な演奏家にも菌に衣着せぬ批評をするなど、音楽への厳しい姿勢と温かい人柄で信望を集めた。NPOでは、遺作の楽器や資料の展示、親交があった演奏家らのコンサート、音楽教室などを計画。地元・丹後地方の音楽文化の活性化を図る。日本弦楽指導者協会会長を務める岩淵さんは「田中さんとの思い出は尽きない。音楽の裏方にいた人の業績を世に伝え、地域の活性化を図るのは画期的だ。ベストの演奏でNPOの船出を飾りたい」と話している。

（毎日新聞）

京丹後の団体「音楽のまちづくり」 弦楽器製作者故田中博さん遺品生かす

府からNPO法人認定

京丹後市峰山町出身で世界的に知られた弦楽器製作者、故・田中博さんの遺品を生かして、丹後地域の音楽振興に取り組む「音楽のまちづくり」がこのほど、NPO法人（特定非営利活動法人）の認定を府から受けた。9月8日には、法人設立記念コンサート「弦楽四重奏の夕べ」を同町の府丹後文化会館で開く。

田中さんは1920年に同町上で生まれ、戦災で疎開していた著名な弦楽器製作者に師事。京都などでの修行を経て、東京に工房を構え、78年に病気で倒れるまでの約30年間、弦楽器一筋に取り組んできた。NHK交響楽団顧問も務めた。

（京都新聞）

program モーツァルト／弦楽四重奏曲ト長調 K387
ベートーベン／弦楽四重奏曲 ハ短調 作品 18-4
ドボルジャーク／ 弦楽四重奏曲 ヘ長調 作品 96 アメリカ

ファーストヴァイオリン 岩淵龍太郎
セカンドヴァイオリン 板橋 健
ビオラ 百武由紀
チェロ 海野幹雄

祝 辞

NPO 法人「音楽のまちづくり」設立記念コンサート「弦楽四重奏の夕べ」が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

NPO 法人「音楽のまちづくり」におかれましては、数々の世界的な演奏家からも高い評価をうけられた京丹後市峰山町出身の故田中博氏の遺品を活かされ、音楽文化の向上を通じて丹後地域の活性化を図ることを目的に設立されたところであり、故田中博氏の豊かな人脈を通じて、丹後の地で著名な演奏家をお招きして音楽鑑賞ができますことは誠に喜ばしいことと思います。

京都府としましても、人が集い、魅力ある京都であり続けるためには、文化を活かした個性ある地域づくりを進めることが必要であると考えており、地域の皆様の文化活動にも大きな期待をしております。

記念コンサートに開催にあたり、岩淵龍太郎様を始めとする役員並びに会員の皆様方の御熱意と御協力に深く敬意を表しますとともに、本コンサートの成功と NPO 法人「音楽のまちづくり」の今後のますますのご発展と皆様方のご活躍を心からお祈り申し上げます。

京都府丹後広域振興局長 奥田登志男

本日、ここ京丹後市で NPO 法人「音楽のまちづくり」設立記念コンサートが盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

NPO 法人「音楽のまちづくり」の設立に際しまして、準備委員会の方々を始めとする関係者の皆様の芸術文化発展への熱意とご努力に心から敬意を表します。

弦楽器演奏の鑑賞機会の少ない本市に於いて、このようなコンサートを通じて、丹後地域における音楽文化の向上、音楽教育による青少年の健全育成にご尽力頂けることは、市全体の芸術文化の発展にとりまして大変意義深いものであります。

このような取組みを通じて、様々な文化にふれる機会がますます増え、京丹後市を始めとする丹後地域全体が文化の薫り高い地域として発展しますよう、皆様の今後の更なるご活躍を祈念致しましてお祝いの言葉とさせていただきます。

京丹後市長 中山 泰

NPO 法人「音楽のまちづくり」設立記念コンサートが開催されますことを、心よりお祝い申し上げます。

この法人は、優れたヴァイオリン制作者でありヴァイオリニストの良き相談者でもあった、故田中博氏の遺品をする資料館の設置を軸として、様々な音楽文化活動を地元峰山で展開していく予定と伺っております。

誠実な人柄と真摯な仕事振りで、多くの人の尊敬と信頼を集めた田中博氏の、楽器と音楽への情熱と遺志が、この法人の活動を通じて、ヴァイオリンの演奏家はもとより、音楽を愛するすべての人々によって受け継がれ、これからも日本の音楽会の発展に寄与されることを願ってやみません。

浜松市楽器博物館長 嶋 和彦

この度は特定非営利活動法人音楽のまちづくりの設立、誠におめでとうございます。

昨年、田中博氏の遺品を拝見させて頂きました。田中氏製作のバイオリン、チェロはもちろんのこと、製作工具をはじめ、図面や型紙、また外国製弦楽器の鑑定書や写真など豊富な資料に圧倒されました。

これらの貴重な資料をご自宅にとどめて公開し、重ねてコンサートの開催により楽器を活かす、このような「静と動」を合わせ持つ活動は音楽への理解を深め、広げる理想的な姿勢だと思います。今後のご発展、コンサートのご成功を心よりお祈り申し上げます。

大阪音大音楽音楽博物館 学芸員 藤本るか

ご挨拶

田中博さんは日本有数のバイオリン・メーカーで、特にN響を中心とする第一級のバイオリニストを始め名だたるバイオリニストの間での信望は傑出したものがあった。 私は

原宿二丁目育ちなので、田中さんが住んでおられた青山二丁目は青山通りを隔ててすぐ隣りの感じがして懐かしい所である。私は田中さんの信奉者であったので良くお宅兼仕事場に伺ったが、私が京都に赴任後も必ず青山二丁目に赴いているいろいろなお願いをした。

田中さんは仕事に関する信念の人で、普通よくあるようなお客に対する愛想の良さは滅多になく、演奏家と雖も楽器に対する認識不足があれば之を叱咤するという気概を持って居られた、希有な存在であった。あれこれ想い起こすと感慨無量なるものがあるが、この度田中さんを称え、且つ記念する法人が認可を受け、故郷の方々の温かいご支援を受け、数々の事業を展開される事は、関係者の一人として誠に意義深いことと言質に堪えない次第である。

岩渕 龍太郎 (理事長)

本日は、田中博生誕の地であります丹後の皆様方に、法人の誕生を盛大に祝福して頂けますことは誠に感慨無量で、光栄至極に存じます。

設立準備中から法人の趣旨に賛同して下さいました皆様には惜しみない御協力と温かいご支援を賜りまして、おかげさまで本日のコンサートを迎えることができましたことを心から感謝申し上げます。

人として誠実で職人として常に真摯な姿勢で偉業を成し遂げました父は、私共遺族の誇りであり、亡き後もその人柄が偲ばれ、遺品が尊ばれますことは私どもにとりましてかけがいのないことでございます。楽器や音楽資料、人脈からなる、宝のような父の遺産が故郷の皆様と共有され、生かされ、このことが文化事業として意義付けられ、音楽の息づくまちづくりの一助になり得ますことを願わずにはられません。今後、丹後地域の音楽を愛する皆様と岩渕龍太郎京都市立芸大名誉教授を始めとする法人の理事の企画推進により事業展開されます法人が皆様の手により育てられ、丹後の未来に輝かしい足跡を残し、いつまでの愛され続けますことを願ってやみません。

最後に、今日に至るまで私どもを激励し、支え、お力添えをして下さいました多方面の多くの方々に深い感謝の念を込めまして心より厚くお礼申し上げます。

あわせまして皆様方のご健勝とますますのご発展を祈念申し上げます。

NPO 法人音楽のまちづくり発起人代表 田中 千穂 (副理事長)

2006年9月10日 毎日新聞



市民の力で音楽振興を NPO 法人「音楽のまちづくり」設立 (富永浩三)

京丹後市出身の弦楽器制作者、故田中博さんの遺品を活用して地域の音楽振興を図る NPO 法人「音楽のまちづくり」設立記念コンサート(毎日新聞社など後援)が8日夜、同市峰山町の京丹後文化会館で開かれた。同法人理事長に就任した岩渕龍太郎・京都市立芸術大名誉教授らによる弦楽四重奏が約300人の聴衆を魅了した。同法人は8月24日に府から認証を受け、設立登記は1日に終えた。コンサートでは岩渕理事長が「田中さんの生まれ育った丹後から、市民の力で音楽振興を」とあいさつ。板橋健さん(バイオリン)百武由紀さん(ビオラ)海野幹雄さん(チェロ)とともにモーツァルトの弦楽四重奏曲ト長調 K387、ドボルザークのへ長調作品96「アメリカ」など名作を演奏し、躍動感や哀愁に満ちた音のハーモニーに大きな拍手が送られた。演奏を終えた岩渕理事長は「お客さんのオーラ、音楽のまちづくりへの期待感を感じた」と話した。田中さんの長女で副理事長を務める千穂さんは大勢の方に来て頂き感無量です。地域のために地道な活動を続けていきたい」と豊富を語った。



「音楽通じ交流を」 弦楽器制作者・N響顧問 父の遺作など展示
 丹後地方での音楽の普及に取り組む NPO 法人（特定非営利活動法人）「音楽のまちづくり」理事長田中千穂さんはこのほど、京丹后市峰山町の自宅を開放し、「タナカヴァイオリンミュージアム」を開いた。千穂さんの父・博さんは峰山町出身で、NHK 交響楽団顧問を務めるなど世界的に知られた弦楽器制作者だった。1990 年の博さんの他界とともに千穂さんは同町に移住、音楽活動の拠点としてミュージアムを設けることにした。自宅1階の2部屋に、博さんが制作したチェロ1本を展示。かなやのみなど博さんの遺品の道具のほか、各国の演奏家との交流を示す写真や、招待を受けた演奏会のプログラムなども多数並んでいる。田中さんは「音楽を通じた交流の場や音楽振興と人材育成の拠点にしたい」と話している。（片村有宏）

注8

田中 博 没後 20 年 記念コンサート 共催 NPO 法人音楽のまちづくり 港区立青山小学校、青山中学校同窓会
 Bonjour Quartet 演奏協力 ボナールカルテット 田中博ゆかりの音楽家有志の方々。

荒巻美沙子

崔 樹瑛



ヴィオラ 阿部春香

チェロ 森和子



【カルテット演奏】モーツァルト ディヴェルトメント 二長調 K136
 エルガー 愛のあいさつ 「マイフェアレディー」から 踊りあかそう
 「オズの魔法使い」から 虹のかなた
 チャイコフスキー 「くるみわり人形」から 花のワルツ
 【弦楽アンサンブル演奏】 バッハ G 線上のアリア
 モーツァルト アイネクライネナハトムジーク（全楽章）

ヴァイオリン 金田幸男 原 和子 埴 美和 白木 良尚（敬称略）
 荒巻美沙子 崔 樹瑛 ヴィオラ 三宅達也 阿部春香
 チェロ 茂木新緑 森 和子 朝吹正行 コントラバス 建部欽司

〈本コンサートの開催にお寄せ頂いたメッセージから〉

（敬称略）

「田中 博さんのこと」 田中博さんの愛娘、千穂さんが父上の生地京丹後峰山町で「NPO法人音楽の町づくり」を立ち上げ、地域の活性化に奮闘されていることに感心するとともに、そのことがまさに今後の我が国の在るべき姿の一端である「地域の特色を発信」することに通じ、日本人が本来大切にしてきた「ぬくもりを共有できる共同体作り」にも発展すると確信しますので、誠に時宜を得た企画と陰ながら敬意を表しております。

この度は「田中 博 没後20年記念コンサート」の開催、おめでとうございます。 田中さんが亡くなられてもう20年になるのですね。（省略）その後ご自宅で、今は亡き母上と千穂さんが献身的に介護されている姿に接し、その家族愛に何度も感服したことでした。1965年頃、理系研究者を目指し勉学に勤んでいた（？）学生時代、同郷の先輩で当時N響ピオリストの村山弘さんに紹介されて恐る恐る南青山のご自宅にお伺いしたのが初めての出会いでした。5～6歳の頃からカザルスのSPレコードを通じてチェロの音色の虜になっていたのですが、美術品としての楽器の魔力にも魅了されていたことなどが幸いしたのでしょうか、何故か気に入られてあっという間に「木戸ごめん」になっておりました。お仕事の邪魔になることも省みず製作過程を拝見したり、楽器についての全てを初歩から教えて頂いたり、時には「これでチェロのサウンドポストを造ってごらん」と言われ遠慮なく「押し鉋」で削ったり、数え切れない程の演奏者等の方々に紹介して頂いたり、その都度夕刻になると「ちょっと一杯行こうか」とご馳走になったり、手頃なチェロをお願いしていたところ、大学の研究室に「おーい、出たぞ！」と電話を頂いたり・・・尽きせぬ思い出が一杯です。 社会に対する貢献の在り方は、父上と異なることはいたしかたのないことですが、「NPO法人」の更なる発展を通じて、千穂さんが峰山町を中心に活躍されることを心からお祈り致します。

（独）産業技術総合研究所 小松 泰彦

<本コンサートにご出席頂いた田中とご縁の有る方々からのメッセージ> タナカヒロシとの心に残る思い出

『・もう20年もたったのですね。田中さんとの思い出は数限りなくありますが、なんと言ってもオケの弦楽器のレベルを上げて下さったことですね。私も、CraskeからPersonへと(買い換えるとき)経済的な面からご心配くださったこと有り難く思っています。千穂さんの活動も素晴らしいです。何かお役にたてることが有りましたらお手伝いしたいです。』 (三宅 達也 ヴィオリスト)

『・私はN響を退職してもうすぐ2年過ぎようとしています。洗足学園音大でオーケストラの指導をしています。田中さんには大変感謝しております。その影響で、本当に今日があるのだと思います。』(茂木 新緑 チェリスト)

『・田中博さんとは、私が17歳でコントラバスをはじめたころよりお世話になり、いろいろな面でご指導を頂きました。弓の購入、楽器の購入の際にとどまらず、フィラデルフィアオーケストラのトラバス修理が出来て引き渡される間に電話を頂き、即座に伺って名器を弾かせて頂くチャンスを得ました。ひいてはそのことが今使用している楽器を選択する際に判断基準になり得たことを考えると大変貴重な経験をさせて頂いたと考えております。

又、高校生の右も左も分からない時期に一度だけソリストに張り替える弓の毛を張って頂いた経験があります。いつもとは違う作業工程を見ながら判らなくとも何か違うということを教えて頂いた経験がその後、卒業してN響に入団してからも忘れられぬ記憶として今も目に焼きついております。渋谷の桜肉を食べさせるお店に連れて行かれた思い出も初めて食した馬肉に感激した記憶にあります。田中博さんの毒舌に圧倒されるばかりでしたが、N響でコントラバスの修理代金にもめた際の親方の「そんなこと言うならいらねー」とばかりに目の前で破り捨てられた迫力ある啖呵に感激したこと未だに忘れられません！今考えると30年近くお世話になりましたが何も恩返しが出来ませんでしたので「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を弾かせていただけるならば望外の喜びです！また握力の強さには驚嘆したこと。軍人として馬に乗られたことも伺い、納得したことも良き思い出の一つです。』

(建部欣司 コントラバス奏者)

『・先年7回忌の集いでしたのにもう没後20年なのですね。年月の立つのはなんて早いのでしょうか。私が(東京芸術)大学に合格しました時、河野俊達先生が、田中さんをご紹介下さって田中さん製作のヴィオラに出会いました。もう50年も前のことです。その後、ヴァイオリン、弓等いろいろお世話になりました。楽器を見ていると田中さんが弓の張替え、楽器の調整をして下さっているお姿が目に見えて参ります。

このたびの集いに奥様の元枝様が居られないのは大変残念に存じます。

お二人のご冥福をお祈り申し上げます。』 (福岡由紀子 ヴァイオリニスト)

『・田中さんの生前には、娘2人が大変お世話になりました。田中さんと言えば青山、奥様との思い出も尽きません。(当時、芸大生だった)祥子は、田中さんから贈られたヴィオラともどもベルリンです。美佐子は、演奏のお手伝いをさせて頂きます。』 (石井澄子)

『・ご活躍のこととひたすら感心しております。これまでの千穂さんの努力されたことが実を結んでいかれているのですね。それと天国のご両親がいつも見守って下っているのですね。』 (中村佳子)

『近衛先生の赤坂の練習所で仕事していた田中さん思い出します。・そして、田中さんの造ったヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの音を聴かせて下さい。当日、楽しみにしていますよ。』

(水戸芸術館 水戸室内管弦楽団 宮崎 隆男)

『<田中博先生への想い> 1. 学生するとき、チェロを譲って頂いた事。 2. 後輩のヴァイオリンを選ぶ時、通路に出て楽器の音色選定をした事。 3. 青山、赤坂界限によく飲み連れて行かれ迷惑を掛けたにもかかわらず、お返しする機会がなかった事。 4. 話は辛辣だが、愛情豊かだった事。 5. 真贋に対し妥協を拝したこと。 いずれも詳細を語れば、紙が足りません。成功を祈ります。』 (山内洋正)

『・1959~60年頃、田中さんの新作の、当時真っ赤で長い(42cm位?)ヴィオラを使用させて頂きました。強い豪快な音で、若干じゃじゃ馬なので私には弾き切れないほどの素晴らしいヴィオラでした。しかし間もなく、BSA(ポストンシンフォニーのキャロルさんが昔使ったポラストリを買う人がいないか)といことで田中さんに相談したところ、田中さんのヴィオラは他に回すから「お前はこれを買え」といつて頂き、ポラストラを入手しました。その後、田中さんのお世話で白川総業がフィラデルフィアのメーニック

から購入したシュタイナーズクール（1700年製）を買わせて頂き、今も所有しております。張りが有って素晴らしく美しい音で遠くまで音が飛んでいく素晴らしい楽器です。当時のオケで大変評判になりました。

1973年楽員交換でボストンに行った時、キャロルさん、他の方のお世話で当時メーニクに居たセルジュ・ペレソンが私のために製作してくれたクライスラー・ガルネリ・デルジェスの拡大コピーのヴィオラを持って帰り、田中さんに大層ほめて頂きました。これも大変評判になり、オケマンが新作を持つきっかけになったと思っています。この楽器は、シュットットガルトフィルのトップを弾いている甥に譲りました。田中さんにはこれらの楽器の調整をいつも最高のものにして頂きました。・・・』
(赤星昭生 ヴィオリスト)

『・・・あれからもう20年が経ちましたか。つい最近のように残っている記憶もあり、また遠い昔の出来事も甦ってきます。ヴァイオリン資料館の文献に役立つよう、私の持っている一部を寄贈しようと思います。・・・』

(医学博士 柏木平八郎)

『1964年頃に、田中さんに選んで頂きましたチェロ、1914年のロメオ・アントニアツィーを、今も使っております。チェロは96歳になりました。私の師、小沢弘先生にも、若い健康で良い楽器だと言ってもらいました。私は駒を夏、冬に取替え、年に2、3枚使っていますが、その中の1枚は、田中さんが千葉で倒れられる1週間前に削って頂いたものです。その駒は、使っている駒も中で一番良くなり、この駒を使っている季節が一番嬉しいときです。私の楽器は、田中さんの思い出一杯です。・・・』
(服部善夫 チェリスト)

『・・・田中博氏は、今でも我々の世代の音楽家、楽器づくりの方の間では伝説的な存在の方で、その後田中氏を越える人がいらっしやらないのが残念であり、日本としても困ったことです。』
(磯崎陽一 ヴァイオリニスト)

『・・・ご盛会をお祈りいたします。』
(川上久雄 鈴木弘一 公門俊之 根津昭義 大久保淑人 元N響団員)

『・・・父（元N響事務長）はこの4月で90になりました。・・・田中さんのアトリエに行くのが私は大好きで昨年亡くなられた（田中）千香士先生に連れて行ってもらうのが楽しみでした。・・・あの頃に調整してもらった駒、ボール紙で作られた指板の下に挟むものはまだ大事にとってあります。』
(出口淳子 ヴァイオリニスト)

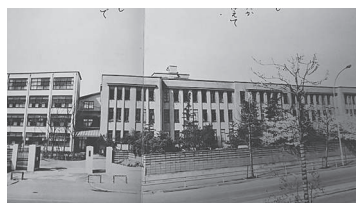
『お父様の作品を大切に保管して公開していることも知り胸が熱くなりました。何度かお邪魔した青山のお宅。玄関に入ってすぐにあったお父様の工房。今でもはっきり覚えています。目を閉じると時空を超えてその場に居る感覚さえ甦ってきます。そして決まって思い出すのはお父様のことをお話するときの千穂さんの嬉しそうな表情。毎日、病床のお父様のために30品目を使った料理を用意しているときいたことがあります。・・・芸術であれ、学問であれ、子供時代に本物に触れる機会がたくさんあると大人になってからの人生が豊かになるような気がします。』

未来へと繋がる有意義な活動で感服いたしました。賛同者が増え、活動の場が更に広がって一人でも多くの子供が参加するとういんですね。最後になりましたがコンサートの成功をお祈りいたします。』
(鈴木節子)

『今年の初めに、田中千穂さんと何十年ぶりに再会することが出来、お父様の追悼20年記念という素晴らしい会に縁のありました青山の人々からも音楽を広めたいとのことで、共催させて頂けますことを、同窓会の事務局を代表致しまして、深く感謝申し上げます。昨今のニュースは人の道に反するような大変悲しいものが多く、千穂さんのNPO法人、このような会から音楽を広く普及させ、一部の人々の音楽ではなく、音楽が多くの人々を幸せにする、お手伝いできれば大変嬉しく思います。』
(青山小学校、青山中学校同窓会事務局 田中依子)

☆多くのお心の籠ったメッセージをありがとうございます☆

下の写真 港区立青山中学校 旧校舎（昭和60年に新校舎落成）
当時の校舎（旧館）・校庭は旧陸軍大学校のものである。都会の一等地にありながら明治神宮外苑の森や赤坂御所の森の緑に包まれている。



妻の元枝と近くの公園にて



【お礼のご挨拶】・・・父亡き後、思い出深い青山を跡にして心機一転、父の業績の証である“青山の工房”を父の郷里で生き返らせようとの思いから、丹後・峰山に移り住みましてから 20 年が経ちました。それでは、“青山の工房”とは私共にとって一体、何だったのでしょうか？父は、音楽を通して、人として演奏家の成長を見守り、陰で支え、演奏家も父を心の拠りどころとしていたのです。技術者だけではなく、良きアドバイザーは、人として時には憧れの対象であったり、師として崇められたり、常に父や兄のように敬愛されていたのです。自ずと娘の私は生まれたときから国際色豊かな演奏家の奏でる生演奏を子守唄にして、多くの演奏家たちと家族ぐるみの付き合いをする家に育ちました。メンデルスゾーンのヴァイオリンコンチェルトの一節にたちまち呼応して、犬も小鳥も歌いだすという、正に楽園のような環境でしたが、同時に演奏家も父も真剣勝負に挑み、修行を積み、切磋琢磨する緊張した姿も目の当たりにし、「一流とは？本物とは何か？」というテーマについて考えさせられる子供時代を過ごしたことになります。父の工房にありました製作道具溢れる空間は不滅のチェロやヴァイオリン、ヴィオラを生み出ただけではなく、異文化、異業種間の交流の世界でもあり、演奏家と父の語らい、時には白熱した議論、心のふれあいあり、悲喜こもごもとした人間ドラマの一角であり、私共にとっては、昔の生活空間のように懐かしい存在なのです。いつの日か、父と苦楽を分かち合っていました演奏家の手により、父の作品を集めた弦楽アンサンブル演奏を皆様に堪能して頂けますことは私共の願でした。本日、この夢を叶えて下さいました演奏家のみな様、田中博ゆかりの皆様方、そして青山小学校、青山中学校のかつての親友の皆様には心から感謝申し上げますとともに厚く御礼申し上げます。今年は没後 20 年記念事業としまして丹後、京都市での同様のコンサートの実施を通じ、田中博が遺しました楽器を含む音楽資料を活かしながら、京都北部での音楽環境の整備に微力ながら努めて参りますので、今後共、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。本日は誠に有難うございました。

田中千穂



挨拶をする金田幸男副理事長



ポナールカルテット



弦楽アンサンブル演奏



かつて日本フィルハーモニー首席ヴァイオリニストのルイ・グレーラー氏や、ヴァイオリニストの小林武史氏から譲られた田中博製作ヴァイオリンを手にして参加された門下生、ベテランや若手プロ奏者がモーツァルトやバッハの作品を共演。





吉原小で演奏会
園児・住民も参加
京丹後
グルジアの作曲家
を中心に演奏して
いるゲオルギア
弦楽四重奏団の演
奏会が 31 日、京丹後市立吉原小であった。府の次世代
文化継承・発展事業で、峰山幼稚園の園児や大勢の住民も
参加。バッハの「G 線上のアリア」などの名曲が次々と披
露された。(2013 年 6 月 1 日 毎日新聞 塩田敏夫)

済んだ音色に耳すませ 与謝野・岩滝 Xmas コンサート
与謝野町岩滝の町立生涯学習センター治癒館でこのほど
恒例の「Xmas コンサート」があった。コンサートはジョ
ージア出身のバイオリン奏者、ギオルギ・バプアゼさんら
のグループ「ゲオルギアカルテット」が出演。2 部構成で
前半はモーツァルトのディヴェルティメント k. 136 が奏で
られ、客席の親子連れらは済んだ音色に聴き入っていた。・・・

2016/
12/10
京都新聞

済んだ音色に耳すませ
与謝野・岩滝 クリスマスコンサート
与謝野町岩滝の町立生涯学習センター治癒館
でこのほど、恒例の「クリスマスコンサート」
があった。コンサートはジョージア(旧グルジ
ア)出身のバイオリン奏者、ギオルギ・バプ
アゼさんのグループ「ゲオルギアカルテット」
が出演。2部構成で前半はモーツァルト
の「ディヴェルティメントk.136」などクラシ
ックが奏でられ、客席の親子連れらは聴き入
りに入っていた。後半はクリスマス音楽を
中心にクリスマスソングなどが演奏された。
【行方一明】



注 10

18 MARTIE, 2014, ORELE 19⁰⁰: Concert „Tanaka Instruments”
Concert instrumental cu instrumente japoneze de la Tanaka, din incheiatura muzicala japoneza de Camera si Orchestra Simfonica.

Dirijor: Ciprian Marinescu
Solisti: Cvarietul Intermezzo
Aoshi Yoshida, violară
Ayaka Kutsuna, vioară

Program:
A. Dvořák: Cvarletul American nr. 12.
Ottav. Nr. 14 în Fa Major
A. Vivaldi: Concertul pentru Vioară
si Orchestra în la minor
- piană -
W. A. Mozart: Concertul pentru Vioară
si Orchestra nr. 5 în La Major,
K. V. 211
W. A. Mozart: Divertisment pentru Orchestra
în Fa Major, K. V. 136

Orchestra de Camera a Filarmonicii de Stat Oradea

オラデア国際音楽祭 (ルーマニア)
Tanaka Instruments Concert
ドヴォルザーク 弦楽四重奏曲
第 12 番 へ長調 作品 96「アメリカ」
モーツァルト ディヴェルティメント
k. 136 演奏 オラデア室内管弦楽団
(ハイドンの弟が創設したといわれる
250 年の歴史がある由緒ある楽団)

Scena altfel”,
în Turnul Primăriei
Festivalul Primăverii
debutează azi

2020 年 11 月 22 日 NPO 法人音楽のまちづくり設立 14 周年記念コンサート ～田中 博生誕 100 年記念公演～
Tanaka Instruments Concert タナカ楽器を使用したカルテット、デュオ、アンサンブル演奏 注 11



バイオリンと指揮 ギオルギ・バプアゼ氏 令和元年度「旭日単光章」受賞
＜弦楽アンサンブル演奏＞ パッフェルベル/カノン
バッハ/G 線上のアリア、ヴァイオリンコンチェルト 1 楽章
モーツァルト/アイネクライネナハトムジーク 1 楽章
＜デュオ＞ エルガー / 愛の挨拶 パガニーニ/カンタービレ
クライスラー / 愛の悲しみ、美しきロスマリン
マスネ/ タイス瞑想曲 モンティ/チャルダッシュ
＜カルテット演奏＞モーツァルトディヴェルティメント k. 136 全楽章
ブラームス/調べのように、ハンガリーダンス 第 5 番

ご 挨拶

本日はご多用中、丹後地域で音楽普及活動を行っております NPO 法人音楽のまちづくり設立 14 周年記念コンサートにご来場賜りまして誠に有難う存じます。丹後の弦楽音楽の歴史の起点となりました、昭和 20 年代後半に丹後に立地したバイオリン工場の遺産を後世に語り継ぎ、引き継ぐという使命の下、平成 18 年 9 月に当団体は発足し、微力ながら活動を続けてまいることができましたのも、偏に京都府様始め行政機関並びに地域の皆さまのご支援とご指導の賜物と心より厚くお礼申し上げます。今年はコロナ禍にありまして、芸術活動は休止を余儀なくされておりましたが、このようは自粛が却って後押しするような形で思いも掛けず、「丹後の人々による、丹後の人々のための自前の楽団の誕生という幸運に恵まれました。本日、皆さまにストリングアンサンブルタンゴの初演をご高覧頂けますことを誠に光榮至極に存じます。

今後とも共感者を増やしながら丹後の音楽文化の歴史の新たなページを刻みたく、精進してまいりたいと存じますので、引き続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

最後となりましたが、ご来場の皆さまのご健勝をご祈念申し上げまして、お礼のご挨拶とさせていただきます。

理事長 田中千穂



ヴァイオリンとピアノの二重奏演奏



鑑賞する学生ボランティア、受講生、一般市民、スタッフ



アンケート集計結果 回収率 67% 満足度(大いに満足) 99.5パーセント

理由：生の演奏は素晴らしい。癒された。アンサンブル演奏やヴァイオリンの迫力。

参加者の感想から：素晴らしい名曲の数々を有難うございます。名曲を作曲して下さった先達の方々、演奏して下さった皆様、そしてこのコンサートを企画、開催して下さいました。誠に有難うございました。

コロナ色で気が塞いでいましたが、生で聴いていて涙が出るほど感動しました、丹後に居ながら生の演奏を聴けるなんてこんなに嬉しく幸せなことはありません。至極のひとときでした。耳の奥までまだ美しいメロディーが鳴っています。バブアゼ様の受賞記念を兼ねてのコンサートでありますとは！ 誠におめでとうございます。素晴らしい演奏に感謝の言葉しかございません。本当に有難うございました！

String Ensemble Tango 運営団体：NPO 法人音楽のまちづくり



【設立までの経緯】文化活動の自粛という背景が拍車をかけるように期せずして会員を含む地元音楽愛好家の「合奏を楽しみたい」という想いが形となり、これまで演奏や楽器指導で関わっていたプロ奏者の賛同を得て6月19日弦楽アンサンブルの誕生に至る。以来、月に1, 2回集まり、専門家から指導を受け、練習を積み重ねた成果発表として当法人設立14周年記念コンサートにおいて初演し、好評を博した。

【今後の活動方針・目標】・定期演奏会を目標にして「合奏の楽しさを伝えていくこと」をモットーとする。・定期演奏会は【Concert Tanaka Instruments】として開催し、丹後の音楽文化の内外に発信する。

・NPO 法人音楽のまちづくりの活動方針である「子どもたちが良質な音楽を享受する環境づくりとリーダーの養成による音楽教育の充実」を図りながら、楽団一丸となり、持続可能な社会を目指す。

【団員加入資格】年齢・経験は問わず。音楽に熱意のある方。

【Concert Tanaka Instruments】丹後出身の弦楽器製作者、田中博制作楽器(チェロ、ビオラ、バイオリン)を使用した弦楽器の名手によるコンサート。

～ヴァイオリン製作者、田中博の“人となり”が伺える対談から～

ヴァイオリン・メイカー H. T a n a k a へのインタビュー



☆イントロ☆

田中博さん 弦楽器奏者たちにとっては無くてはならない人。
その製作、修理調整技術に於いては、現在日本で田中さんの右に
出る人はいないといわれています。

Q. 田中さんがこのお仕事を始められたのはいつですか？

A. 戦後直後だから30年くらいかなあ。

Q. 特別な師匠はおられたんですか？

A. い～や。私の場合は先生というのは過去に作られた作品そのものなんです。
昔作られて、そして現在でも奏者の要求を満たしている作品ですよ。

Q. 手づくりのものって、ほんとうに一つ一つ違いますからね。

A. そう、こんなに複雑で個性的なものはないですよ。私ら、その時にこれだ！というものができたと思っても、改めてほかにこれをはるかに超えたものがあることに気づく目をもってのわけで、つらいですね。けどどうしてもできないものを作ろうとする心、それが魅力的だと思いませんか？

Q. なるほど、一生続いていく男の坂道というわけですか。

A. いやー、だらだらやってるわけですよ。だってね、経年変化って言葉があるでしょう。300年前のヴァイオリンの移り変りを知る由もないですよ。だから今作ったものが300年後にどうなるかわからない。勝負はつかないですね。特に弦楽器は、その経年変化の影響が強く現われるものですから。

Q. 音色なんかはどうなのでしょう？

A. 変わらない。いや変わっているかも知れないが、やはり素晴らしいものです。だからそういう同じようなものを作るか、又、違った新しい個性のものを作るかということになってくるんですが、この仕事というのは修理をするにしろ、演奏会を聴きにいくにしろ、兎に角たくさんものを見ないと目が肥えて行かないんですよ。肥えた目でほれたものを復元したり違うものを作ったりしているうちになんだかわからなくなっちゃう。30年やって来たってこの始末ですよ。だからとても面白いともいえますがねえ。

Q. 今までに田中さんの手にかかった弦楽器は相当な数でしょうね。

A. ああそうだねえ。外人の奏者のものも相当あるし、現在では、水準の高いものが日本にもたくさん入っているから私はいわばそいつらの子守役ってところかなあ。

手作りの楽器を修理するには、人間でいえば医者が必要。

Q. ひとつひとつの保存の仕方が違うんでしょうね。

A. そうですね。新しいいものを作るよりも、私は寧ろそちらの方が大変だと思いますね。多くの素晴らしい楽器が保存不完全であったために生命を失ってるってことがよくあるんですよ。手作りの楽器を修理するには、人間でいう医者が必要がなきゃどうにもならない。生半可な知識で薬を飲んじゃって余計悪くなる病人がいるでしょ。だからね、専門家、それも本当の専門家に見せなさいということを特にいいたいですね。

Q. ひとつのヴァイオリンを手にする時、田中さんの心の中にはどんなことが浮かびますか？

A. 先ずね、新しい経験をするということのよろこびってのかなあ……。ちょっとオーバーかも知れないけど、何かを得ることができる期待だね。そしてその楽器の内部を見ることで、そのものの製作者の魂に触れることができる、その喜びを感じますね。

Q. 作者の性格的なものがうかがえるわけですか？

A. そうです。その作者が誠実であったか、そうでなかったか、その仕事に誇りをもっていたかなんてことまで感じられるんですよ。どれだけの年月を経ても、楽器そのものが作者の人柄や熱意を後世に伝えているってこと、素晴らしいじゃありませんか。これが芸術だって気がするかなあ。

Q. 作った後長い間、評価の対象となりますからね。

A. ええ、楽器に対する好みというものが様々である方に作り手の好みといいますか、一口に良いといってもいろいろに評価されますからね。それと作品への本当の芸術性というのは死後長い年月を経たのち評価されますから、恐ろしいですけど、ある意味ではこんなに夢のあることはないですよ。私が手にしたものが又100年たってその時代の天才といわれる奏者を魅了するかも知れない。

☆エンディング☆

これ程一徹な人はいないと街の噂。
球形の荒野を歩いているようなもんだと言い乍らも、
ご自身への限りない愛着が伺われました。

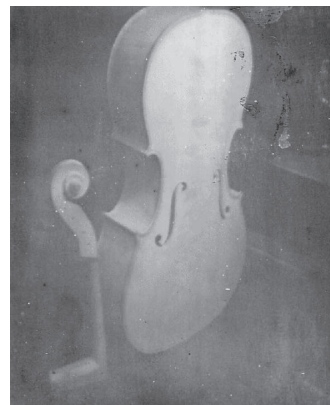
(1977年8月 大場ケイ子のビューティフル・クリエイターから)



1970年代初頭 チェロ制作風景



無垢の木にノミを振るい、カンナをかける姿は、我が身を削り、自らの魂を作品に吹き込むが如く。



この「縁の下の力持ち」シリーズも、回を重ね、ようやく一三回を迎えることになった。一見華やかにさえ思える楽壇の陰に、常に脚光を浴びることもなく、その成長と進歩を願い、謙虚な立場にあつて、ねばり強い忍耐力と積極的な努力を積んで、いわばその支えとなっている人々に対する理解者を、ひとりでも多くするということは、同じ楽壇に生活するものの一つの義務でさえあろうし、それらの人々のよりよき将来を願うのは、私ひとりでないはずである。それは、時として意外にも、その周囲の人々の中にすら非理解者を発見することがあるとするならば、なおさらのことではあるまいか。彼らが、たとえ陽光のもとでアピールすることを望まないとしても、ひとりでも多くの理解者の増すことを、拒むことはできないのであろう。編集部の、そしてこれらの人々の意にそえるかどうか、ともかく今日もまた、新しい「縁の下の力持ち」のもと、訪ねることになった。

さて、今月はやや方向をかえ、弦楽器の製作、修理、調整、そして弦楽器奏者たちのよきアドバイザーをつとめ、またよきコンサルタントともなっている、田中博さんにご登場願ひ、いろいろ仕事のこと、そしてまた仕事の上でのお考えについて伺うことにする。田中さんは必ずしも一般によく知られた方ではないかもしれないが、専門家なかまでは、知る人ぞ知るその道のエキスパート、その打算を離れた一徹な職人気質は、時にはうとまれおそれられながらも、反面、気のおけない親しさを感じさせる人柄をもっている。オーケストラの楽員の休日に、誘われて一緒に夜釣りに行くかと思えば、夜中に叩き起こされて楽器の修理を頼まれるといったことがらは、その生活のわずかな一面にすぎないかもしれないが、こういう演奏者たちとの密接なつながりの中に、研究が生まれ、またお互いの信頼も増してゆくようでもある。

学生時代には、化学を専攻しておられたそうだが、長い軍隊生活に、いわばその個人的生活を中断され、終戦を迎えてから、ようやくかねてから考えていたことの道に、本格的に進むようになった。これからの約20年が、田中さんの楽器とは切っても切れない生活を、きずきあげているのである。当初は関西に住んでおられたが、その後昭和29年ごろ、友人たちにすすめられて、東京へ移り、今日に及んでいる。一言に弦楽器といっても、田中さんの場合、その手にするのはヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスという一連の楽器に限られているが、いわゆる「弦楽器に憑かれた男」の、たゆまざる研究とその夢は、無限のひろがりをもっており、話が進むにつれて、その口調も熱を帯びてくる。それはつきることをしらない研究への情熱と、強い自信とに裏付けられたものを感じられた。質問のなかばは、この機会を通じて理解されていない人々に、すこしでもよく知ってもらいたいという、田中さんの意向もあつて、そういった話題を中心に、進めていった。最初に先ず、田中さんの仕事の範囲といったものについて、お話をうかがう。

「楽器制作、修理、調整ということは、もちろんのことで、それにはまた多くの研究課題が付随してくるわけですが、一方演奏家の方たちが、自分の今まで使っていた楽器を、もっとよりよいものに変えようとするときに、アドバイザーしてあげたり、また現在使っておられる楽器についてのいろいろな質問に答えたり、その楽器の生命を十分に生かすということについて、相談のつてあげています。楽器には、ご存知のようにあまりよくないものから偉大な芸術家の方々の持っているもの、未熟な若い人々が作ったものから、もっとも整った経験豊かな巨匠の手になる名器にいたるまで、その種類は数限りなくあるわけです。そこで、それらの広い範囲のそれぞれの楽器についての相談に対して、自分の経験と知識とを最大限に生かしてサービスするのが、いわば私の天職だと思っているわけです。」

そう語る田中さんには、明らかにその天職を誇りとする人の喜びが、あふれている。楽器へのサービスは、きっとある人々にとっての、まさに神への奉仕につながるものに相違あるまい。そこで製作上のことから尋ねてみる。「新しい楽器が、傑作であると同時に将来においてもその本来の音を失わないで、すばらし音色をもち続ける。ということが、楽器のひとつの理想像であるわけですが、そのような楽器の製作が、どんなに困難なものであるかそしてそこにどれほど多くの未解明の条件が介在しているかは、いうまでもないと思います。楽器をつくる上の中心となる要素には、材料、構造、塗料（ニス）といったものがあるわけですが、このうち材料は、現在では比較的容易に入手できますし、また構造についても形、fホールなどは、理想とする傑作の模写をすることも、けっして不可能なことではありません。ですが、クレモナ時代のヴァイオリン、あるいはイタリアトーンをもっている楽器などについて考えてみますと、いま申し上げたように、木材、材料という点では当時も今日も変わらないとするならば、やはり楽器の構成そのものについて、もっと深い関心をもつ必要があるという結論が生じてくるわけです。なぜならば、これらの名器は今日では多かれ少なかれ、修正が加えられているにもかかわらず、それらの構成そのものは、そのまま保存されているはずで

ニスなどにいたっては、ほとんど魔消してしまって、コーディング（上塗り）が施されているのが事実ですし、現在このことは常識とされているわけです。それにも関わらず、名器の音そのものは、生き生きと今日そのままのこっているということには、楽器の構成そのものに、何か簡単には解明できない神秘的なものがあるようにさえ感じられるのです。そこで私どもは、楽器制作の第一条件が、その構成にあるのではないか、という結論を得たわけなのです。」

たしかに名器が今日も名器として残るには、当時も名器としての生命と評価を得ていたはずである。そしてその歴史のなかでの常識が、実際には楽器には常識となっていないことに、田中さんは、少なからぬ不満をもっているようにも思える。

「調整とニスそのものについても、同じように決して模倣できるものではないと思います。おそらくこの問題も、一生涯をかけてさぐるべきことに違いありませんし、われわれの代を過ぎ、そして更に何年あとに解明されるかも、今のところわからないといっても過言ではないでしょう。たとえば魂柱の調整ひとつについても、その正確な法則を発見するなどということは、おそらく不可能なことではないですか。そこで、各自が、自己の判断と、その持てる感性を最大限に生かしていくことが、最善の方法といえるし、また結局は、それしかないということになるのですが、ヴァイオリンの製作者というものは、病因の解明について、最もすぐれた実力をもつ医者と同じでなくてはならないのですが、医者からみて、人間ひとりひとりが、たとえ兄弟や双生児であっても同じでないように、楽器ひとつひとつも、たとえ似ていてもそれぞれは違うわけですね。そこで、時には普遍的な法則にもとづいて、仕事をするのが可能は場合もあるのですが、多くの場合は自己の経験に基づいた判断と感性とを駆使して手を下すわけです。時には、その直感が幸運をもたらすであろうことのみを信じて、仕事をしなければならないことさえあるのです。」

20世紀の科学も、数世紀以前の名器の前では、その力を発揮することができないようである。すぐれた芸術の神秘性というものは、そういうものに違いないと思ってみたりする。そこでもうひとつ塗料の問題についても説明をもとめる。

「ニスの問題については、常に謙虚でありたいと思っていますし、そうあるべきだと思います。理想的なニスの製法を発見し得たなどと、自惚れることなどはあってはならないはずのことなのです。とにかく、まずどんな質のニスでなければならないかを考え、そして知らなければなりません。ニスの秘密を発見したと信じて、その法則をのこし、またそれによって残された楽器があったとしても、それが数十年後には誤りであったと知られるのが実情です。ニスは、いずれも本来は、軟らかく素適なものであったのでしょが、何年かあるいは何十年かを経た時に乾かなかたりまたは硬すぎて割れてしまうこととなります。ニスというものは、すくなくとも変化してはならないものだと思うんです。塗料にはわけてみると表に被膜としてのこるものと材料に浸透してゆくものがあるのですがこの浸透するものは、楽器の音そのものと、もっとも強いつながりをもっていると思われ、ですから、ニスに変化するということによって本来の楽器の音は、何年かのちに、あるいはすぐにでも失われてしまうかもしれないわけです。それと同時に外観としても重要な要素となるニスがあるわけですから、ニスを塗るということについては、事前にどれだけの準備をするかということが大切な問題になってくるわけです。私はニスの合成に関しては、相互に等しい分量にわけることが、望ましいと思っています。多くの権威者たちはニスというものは、楽器の音色には影響力をもたないと考えているようです。そしてその人たちは、木の保護と装飾とのために使用されているという説をとっているようですが、オイルと樹脂の構成分子というものは、長い間にまったく酸化されてしまっているでしょうから、それを分解してみても、そのような実験の範囲からは推測が生じるだけで解答は得られないでしょう。それでたとえその主成分がわかって、どのような過程で塗られたかということは判然としていないわけなんです。塗料についてのいろいろな書物にのっているエピソードは、注目すべきものがあるのですが、紹介された話のどれを信用してよいかは、実際のところはわかりません。わたしは何回かストラディヴァリをみる機会をもちましたが、そこには常に疑問をはさむ予知はまったくありませんでした。そこには真実があるだけなんです。ニスをつくることの主なねらいは、けっして振動に影響することのない弾性を求めるということだと思います。振動に直接影響するといった支障はニスが非常に硬いか、あるいは軟らかすぎるとか、又ねばねばするといったことによって起こるものだと思います。音を作り出す根源を分析解明してゆく学者の方々の努力はそれ自体尊いものですし、賞賛すべきものだと思います。でも、常にわすれてならないことは楽器ひとつひとつは必ず各々の特徴をもっていることなのです。同じことをする芸術家はふたりいないでしょうし、同じことを説明しようとする解説者もないわけです。おそらく人間の耳で、同じように聴こえる耳は一對もないでしょう。楽器も同じ楽器はけっしてふたつないはずなんです。」

話が進むにつれ、相当専門的な問題になってきましたが、その熱にのってもうすこし楽器制作上のいろいろな事情や最近海外で重要な課題となっている楽器保存ということについても、話をすすめてゆく。

「新しい楽器の製作にだけ関心を持ち、またその研究をしたいのであればミッテンヴァルトとミルクールの職業学校で、その技術的なものは習得することができますし、どちらもよい勉強ができると思います。けれども技術の習得や学習というものだけでは、芸術や科学の研究の究極に到達することができないのは当然のことですし、むしろそれは、ようやく出発点に立ったことを意味していると思います。ところで、ここに非常に興味深い意見があるんです。それは、新しい楽器をつくることよりも、楽器を保存したり、修復することのほうが、もっと大切だということなんです。たしかに多くの素晴らしい楽器が、補修や保存がわるかったために、その生命を失っているわけです。もちろん、制作そのものについても、非常な熟練を必要とするのは当然ですが、ともかく一応、製作者というものには、だれでもなり得るといっても過言ではありません。けれども、よい楽器の保存ということについては、単なる製作技巧を超えたものがなくてはならないということは、とくに銘記すべきことではないでしょうか。たとえばここにストラディヴァリがいくつかあったとしても、すべてを同じに扱っていて保存が可能かどうかということは、大変な問題になるわけです。

さらに楽器の補修のことについては、それから、すばらしい楽器を調べるためにそのヴェールを一枚一枚はがしてゆくということとは、われわれ職人にとっての、最大のよろこびのひとつですし、その時の新しい経験への期待はちょっと表現しきれないほどのものです。楽器の内部をみることによって、その本質的な部分がどこにあるかということが、わかってきます。その補修することについての原因が、たとえ何であるにしても我々はそれを補わなくてはならないわけです。ひびや補強のためであろうと、バスバーのとりかえのためであろうと、気持ちをいらだてるような音の、発生の原因を探り出したり、点検したりするためであろうと、中を開いてその楽器の内部を見る時には、まったく熱中してしまいます。不属品を慎重に取り外し、魂柱の位置を確かめてから、ある一点にナイフを入れて裏板をはがすわけですが、その瞬間には、ちょうどその楽器の製作者の魂の中をのぞくような興奮を憶えます。楽器というものは、内部をみることによって、外からみるよりもはるかに多く、作者の性格を知ることができるのです。その製作者が誠実であったか、だらしない人であったか、内部の仕事にも外面にも現われない注意深い工作の中に誇りをもっていたか、というようなことも感じられます。表板をはがすことによって、さらに数多くのことを、知ることができるんです。たとえば、楽器の起源に対する信憑性に結論を見出したり、いろいろな製作法をみつけたり、ほんとうに、そこには製作者のありのままの姿が、忠実にのこされています。どれだけの年月を経ても、楽器そのものが、作者の人柄や熱意、そして誇りを後生に伝えているということに、真の芸術の姿が、みつけられるのではないのでしょうか。」

その楽器への無限の愛着の中に、職人と自称する田中さんの、面目まさに躍如たるものがある。ここで、事のついでに弓の製作についてもたずねたが、

「弓は材料自体にいろいろな問題があります。よくご存じのように、弓一本で2千ドルとか2,500ドルとかいうものがあるわけですが、弓の製作というのは、特別な才能ですね。よっぽどえらい人がつくるんじゃないですか。」

ということであった。

ここで、やや話題を転じて、日本の国内での状態について、少し言及して頂くことにした。

「日本へも、最近ではすでに相当の数のある水準に達した楽器が、入ってきているわけです。日本というところは、よくいわれるように非常に湿度が高いのですが、また時には乾燥することもあるところでしょう。こういった条件の中での楽器の保存の問題は、まず重要なことといえるでしょう。そういう点で楽器保存の問題自体は、世界的なものではありますが、その一環として日本での研究が、進められるべきだと思います。それから、日本にいるということは、ある意味では、その地理的な条件のわりには、かなり恵まれていると思えることがあるんです。それは、相当数多くの海外の人達の楽器がみられるということなんです。外来の演奏家による演奏会があるでしょう。その中で、私のお目に掛かった大家の方々は、いろいろな種類のしかも一流のものを持って来られていましたし、それに東南アジアあたりに演奏旅行に来た方たちでも、たとえ演奏はしなくても、東京にはよく寄ってゆくでしょう。こういう人たちの楽器にも、随分素晴らしいものがあるって、そういったものを見るチャンスに恵まれることが多いわけです。ものの判断というものは、よいものをみなくては不可能なことですね。一番よいものにどれだけ近づいているかということで、我々の目の前にあるものの水準を、知ることができるわけです。それから楽器には、絵画的要素、彫刻的要素、たとえば縁あるいは面、そして色彩というところにも、その出来栄が現れています。しかし、もっと重要なことは、楽器に対するいろいろな判断が、当然のことのようですが、外見だけでなく、音にあるということです。そして造形的にある水準に達している楽器は、音もそこまで追求されているようです。全部引き出し得るかどうかと云うことは、演奏家の範疇に入ることでしょう。」

ところで、この話を進めてみると、この音に対する感覚というものは、一般的に言って、やはり外人の演奏家のほうがはるかにすぐれている面があるようだ。

「日本の演奏者も、楽器の工程というか、どういう方法でどういうふうになられているかということは、現在ではほとんどの方が知ってはいますが、この音という問題については、本当に信頼がおけるのは、日本人では海外に出られて勉強されてきたいく人かの方々や、ごく限られた人しかないといえます。海外に演奏家が、そういう意味ではよい耳をもっているということは彼らが、ひとつの段階をふみながら、常に本当の楽器をえらび、それにふれてきたことにあるのだと思います。たとえば故障をみわけることについても、視覚で判断できるものは誰でもわかるわけですが、外人の方は音で全部判断してしまいます。それから弾きづらくなったことでも、何か故障がおきたことを知るわけですね。そして、その処理の仕方がすぐれているというか自分で応急処置をする能力を持っているんです。もうひとつ、これもいい例なんです、膠というものについても、外人なんかは、正しい知識をもっているんですね。湿度の高低や保存が悪かった場合などに、膠が影響を受けて離れることがあるのですが、楽器というものは、そういうことになりやすい状態のところを持っていった場合、離れてくれないと困るんです。たとえば、非常に乾燥しているところに持って行くとしますと、木は縦には収縮しませんけれども、横に収縮するために、膠が硬いと壊れてしまうんです。こういう時、外人の方の場合は軟らかい膠でつけてくれと、ということをお願いするんです。ですから、職人的な考えで、これはいっぺんつけたら絶対に離れないようですと、何百年も楽器の生命は続かないことになってしまうわけですね。もちろん離れてくれたら困るところもあって、その使い分けが必要となるわけなんです。まあこういった点を見ると、外人の演奏家は、楽器を自分のものにしているが、日本では、まだ楽器にひっぱられている人が多い、ということにもなるでしょうね。しかし、ともかく日本人の方々のなかにも、すぐれた耳の持ち主や、楽器の正しい理解者が現われつつあるということは、この世界の進歩を意味するものだと思います。実際にこういった人たちの要求は、大変高度なもので、ついてゆくことが容易でなくなっています。ですから楽器そのものに対する心構えに変わりはないのですがこういう方たちの楽器にふれるのは、余計緊張するようでもあります。」

このような話の中から、ともかく演奏者たちが、積極的に楽器に対して接近しようとしていることが知られるが、それゆえにこそ、田中さんのよきコンサルタントとしての位置が、その存在の意義をもつことになるのだが、

「私のところへは、独奏者の方々もちろんおみえになりますが、オーケストラのメンバーや音楽学生、そしてアマチュアと、広い範囲の方々に来られます。中でもN響、日本フィル、読売日響などのメンバーの相当数の方々の楽器の相談にのっていますし、またずい分の方々に、新しい楽器に変える場合のアドバイズをしてきました。奏者個々にとって、楽器の良否は重大であるにちがいはありませんが、オーケストラそのものの水準の向上ということに、こうした楽器にたいして理解力を高めている楽員の存在が、あずかっていくのではないのでしょうか。」

ということで、田中さんと東京の楽壇との接点は、かなり大きなものであるようにみうけられた。そろそろ紙数もつきたが、結びとしてさらにひと言。

「楽器にたいする好みというものが、十人十色であっても、製作者として自分でよいと思うものはひとつです。要するに、楽器自体の水準が同じであれば、評価も同じということであれば、演奏家はその好みによって、同じ水準のものから選ぶということはあるわけです。楽器が手によってつくられるということは、そこに何らかの形で、作者の癖というものが、はっきり現われてきます。ですから楽器の水準のちがいは、作者が常に考えている水準の高低が、招きだす結果であるわけで、そのために質の高い理想を追っているわけです。もちろん製作にも年季が必要であり、積み重ねがよりよい結果を生んでゆくには違いはありませんが、ただ個人個人の円熟期というものがあることによって、当然違いがでてくるでしょうね。それにしても、ともかく作られたものは



常によくなくてはならないし、それが永遠に継続され得るものでなくてはならないということが、最も重要な問題にちがいはありません、その作品の芸術性は、死後の長い年月を経たのちの評価に現れるわけです、ストラディヴァリが、90何歳まで、そこに注ぎ込んだ情熱は、当然我々ももたなければならぬものです。それでも、日曜も祭日もない、そして定年もない厳しい職人の生活の中にも、よい楽器を手にしたときの大きな喜びがあるわけで、ふるい名器を手掛けるごとに、あらためて、クレモナの偉大さ、深遠さを、しみじみと感ぜずにはられません。」

(出典 音楽芸術 '66—5)

～田中博製作の楽器が世界を旅することがわかる、世界で活躍する演奏家の便りから～

・赤星昭氏（ベルリン放送管弦楽団コントラバス奏者）みわ（ヴァイオリニスト）夫人のお便りから

1963年4月20日ベルリン

「・・・今日入学試験が済み、シェパリッツにつくことに決まりました。ベルリンフィルの第一コンサートマスターです。試験の先生は20人並んでいたけれど昔のコンサートマスターのアントン・プレロや偉そうなのが勢いで弾き終わったら『アンタの楽器はどこので誰の作だ？』と皆が聞き、先生の間でひっぱりだこになり『ものすごく良い楽器だ』とヒロシ・タナカのネームを皆で見て感心していました。

田中さんの楽器が認められてこんなに嬉しかったことはなかったです。今度田中さんの写真を持って先生のところに出かけていく心算です。・・・」

・メニューインと演奏活動をするヴィオラ奏者、安良岡ゆうさんのお便りから

「12月ロンドンにてメニューインとブラームスを弾き、田中さんのお作りになったヴィオラを弾きました。『デル・ジェスの2つに混じって大変良い音がした』と皆に言われ、新聞にも良い評が出てとても嬉しいことでした。・・・

バルセロナでシューベルトのコンサートがあり、私は全部ヴィオラを弾きルネリ・デ・ラ・ムジカで

『大変豊かで良い音だった』ととても評判で色々な人から『楽器は？』と聞かれ、『H. T a n a k a』と答えるのは大変嬉しいことでした。

・クリーブランドオーケストラに採用決定した留学生広江洋子さんのお便りから

「とても喜んで頂くNEWSなんです。今日は！私クリーブランドのアシスタントコンサートマスターになりました。まだ信じられません。・・・指揮者のロリン・マゼール氏がヨーロッパに発つ彼の最後の週に私を入れてくれたんです。・・・3年経って少しずつ人とまともにしゃべれるようになりました。・・・この頃しばしば田中さんのことを知っている人と出会い、『タナカさん、とっても良いひと。』と皆に言われるので大きな喜びを感じています。」

・ヴァイオリニストの小林武史さん著、「ヴァイオリン1挺、世界独り歩き」（芸術現代社）のなかの
（東南アジア演奏旅行日記から）

「私は今回の旅行には楽器を2つ持っていきました。一つはグッルネリで、もう一つは私の古い友人で楽器製作者の田中博さんが作ってくれたものです。前に2回東南アジアを演奏して廻った時、湿気で楽器の表面が剥がれてしまつて大変いやな思いをしたのです。その話を聞いた田中さんは、それでは君のグッルネリと同じサイズのヴァイオリンを作って上げようと約束して、ある期間がたって出来上がり、なんと無償で私に提供してくれたのです。・・・

注)この事業は外務省及び国際交流基金の後援により、1972年～74年にかけて文化交流のための演奏旅行が行われた。

椎名素夫氏からのご礼状

「突然手紙を差し上げる失礼をお許し下さい。小生 小林武史氏の東南アジア運動のお手伝いを致しておりますが過日氏が貴方様のおつくりになった楽器を見せて下さり、且つそういう善いことに使うのなら無料でよいと云われたということで大変に嬉しそうな様子を見、僭越ながら 私からも是非一度お礼を申し上げたくなり、筆を取った次第です。

この運動は当初からすべて関係者が何もかも身銭を切つてやることにして出発致しましたが実のところこんな世の中でそのような世間離れしたことが通用するものかどうか幾分内心では危ぶんでいましたところが 日一日共鳴者が増え、思ったより遥かに多くの善意が依然として存在することを窺見し、勇躍しております。

誠に差出がましいことは承知致しながら嬉しさの餘り、一筆お礼申し上げます。

時節柄 呉々もご自愛の程 願ひ上げます。

10月2日

椎名 素夫

田中 博 様

注)椎名 素夫：衆議院議員（4期）、参議院議員（2期）、自由の会代表、無所属の会代表などを務めた。
自由民主党副総裁、外務大臣、通商産業大臣を歴任した椎名悦三郎氏の次男。

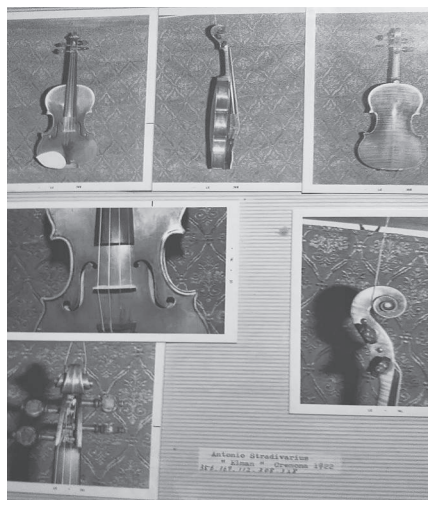
田中博 様	十月二日	娥一の餘り一羊仰礼申上げます。 時節柄も仰自筆の程願ひ上げます。	誠に差出が早いことは承知致しなから することも甚だしいことには承知致しなから 逢かにも多くの善意が依然として存在 するところが、其の爲に増え、思つたより ものがたうか、幾分内心では念がんでいた ところが、一日、其の爲に増え、思つたより 逢かにも多くの善意が依然として存在 するところが、其の爲に増え、思つたより ものがたうか、幾分内心では念がんでいた ところが、一日、其の爲に増え、思つたより	この逢動は当初から、其の爲に増え、思つたより 逢かにも多くの善意が依然として存在 するところが、其の爲に増え、思つたより ものがたうか、幾分内心では念がんでいた ところが、一日、其の爲に増え、思つたより	空然手紙も差上げ、失礼をお詫し 下さい。小生、小林武史氏の東南アジア 逢動のお手紙も致してあります。が、 是日氏が貴方様のおつくりになった楽器 を見せて下さい。且つ、さういふ善いこと 使うなら、無料でよいと云われたとい ことで、大変に嬉しく、その為、椅子を 有が、私から、是れ、一、一、仰礼を申し 上げ、さくさく、筆をとつた次第です。
----------	------	-------------------------------------	---	---	---

椎名素夫氏
 からの礼状

椎名素夫



タナカさんへ
ヨゼフ・スーク



田中が修理・調整を手掛けた名器の写真集から修理中のストラディヴァリウス

A. ストラディヴァリウス (1722) 鑑定書



親交のあった国内外の演奏家の、ご招待コンサートプログラム 楽器・工具、型紙、専門書、鑑定書等資料の展示物



花と音楽の館



T a n a k a V i o l i n M u s e u m

1階 事務所 資料展示室 喫茶コーナー 図書コーナー 和室

〒627-0041 京都府京丹後市峰山町菅 573 番地の 1 TEL/FAX 0772-62-5994

E-mail info@ongakunomachi.com <http://www.ongakunomachi.com>

◆ 開館時間 9:00~17:00 (平日) ◆ 入場無料 要予約

2010年5月28日発行 「弦楽器製作者 田中 博 活動の軌跡 ~丹後・峰山一京都・桂一東京・青山~」
(宮津市立図書館所蔵) を2020年12月1日田中 博没後30年及び生誕100年を記念して改訂。